
BlueMoon

ユウユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Moon

【Nコード】

N1364C

【作者名】

ユウユウ

【あらすじ】

この話は太陽の無くなってしまった世界で、青い月を探すという物語です。主人公フィルの気持ちなどが伝わったら良いと思います。

プロローグ

プロローグ

誰も居ない公園で僕はたった一人で空を見上げていた。

僕の視界には変化のない黒い天井が広がっている。それは何処までも続くような気がしてしまい、憂鬱な気持ちになる。その天井は透明で、外が見える様になっているらしい。けれど外が真っ暗なのか、その天井はそこに付けられたライトの明かり以外、何も映しはしない。

この世界には天然の明かりはない。

何でも七十二年前に太陽という恒星が消滅してから、この大地は一度も天然の明かりに照らされたことはないらしい。どうしてそうなってしまったのか？ それは今でも分かっていない。ただ、そのころは何もかもが光に満たされた時間と、闇に閉ざされる時間があつたらしい。

そして気温も今とは違い大分暖かいものだったと聞く。今は昼間でも厚めの服を着ていないと、寒くて凍えてしまう。

だからなのか、僕の周りの老人達は懐かしそうに昔のことを語る。「あの頃は良かった」と、何度も何度も繰り返す。ただ、あの頃を知らない僕にはどうでも良いことだった。

でも、ちょっとだけ見てみたいと思う。太陽という光に包まれていた頃の世界を……

不意に一定のままの光に照らされた足元に、影が作られた。

振り向くと少し長めの白髪を風に揺らし、茶色のコートを着たフロウ兄さんがベンチに座っている僕の肩に手を置いて、眉をしかめて上から覗く様に僕を睨み付けていた。

「フィル、お前またこんなとこで何してんだ？」

「別に……青い月が見えないかなと思って」

「お前、十五にも成ってそんな都市伝説を信じてたのかよ」
呆れたように兄さんは額に手を添えた。

BLUE MOON

誰が言い始めたのかは分からない。けれど何時しかこの世界に広まりだした噂。それは凍てつくような寒い夜の夜に青い月が現れ、その月に向かって出来ない相談事を話すと、月がその相談事を解決してくれるというものだった。

「僕が何を信じようが兄さんには関係ないだろ」

兄の馬鹿にした態度のせいか僕の声は少し苛立ったものになっていた。

「あのなあ、お前が変な宗教に入ったら大変だろ。違うか？」

「兄さんは話を飛躍し過ぎる」

両手を広げ挑発するように言って、僕はベンチから立ち上がる。

凍えるほどの風がフードの隙間を通り、僕の首を撫でる。どうやら、もう大分遅い時間のようだった。

「ほら行くぞ。もうとつくに地熱システムが切れちゃってる時間なんだからな。というか、そろそろソールも止まるぞ」

ソールも止まるということを聞いて、本当に遅い時間だということを再確認し、今更ながら兄が迎えに来た理由が分かった。

この小さな世界、ドームを温める地熱システムは午後六時に停止し、ソールも九時には止まるようになっていた。ソールとはこのドーム全体を照らすために作られた、ドームの表面に付いた電灯と街灯、更にはそこに電力を回す発電所などを含めたライフラインの総称のことだ。

そして朝の午前三時に両方とも起動する。それが僕の住むドームでの決まりだった。なんでも電力の節約の為らしい。この透明なドームの表面に張り巡らされた地熱システムは膨大な電力を消費する。

そして、それがなければ人は凍えて死んでしまう。その為、出来る限りの節電をしなければならぬらしいが、此処に住む約六万人の五人に一人は夜間も動かして欲しいと言っている。

僕もその一人だが、そう言っているほとんどの人が遊びたい盛り
の若者らしく、この願いが聞き入れられたことは一度もなかった。

「ねえ、フロウ！ まだファイルは見つかからないの？」

公園の外から少し苛立ちの混じった、聞き覚えのある女性の声がした。

「わりの、今行くから！」

そうやって大声で兄さんが公園の外の誰かに返事をする、今度は「はぁい」と言う元気な声が返ってきた。それを聞くと兄さんは僕の手を引っ張って無理やり走らせる。

「……スレイ来てるの？」

「来てるぞ。だから彼氏の俺としてはあまり待たせたくないのだがね」

言って兄さんはとても幸せそうに微笑んで、僕の手を離れた。

そうして公園を出たところで、僕等はスレイに怒鳴られた。

「遅い！ どれだけ待たせんのよ！」

塗料の剥げたガードレールの上に笑顔のスレイが座っていた。だから彼女が怒っているのではなく、からかっている事が直ぐに分かる。足元にはパンパンに膨れ上がったトートバックがあり、その縁からは幾つかの食材が見えていた。

「ああ、ごめんごめん」

などと律儀に謝りながら兄さんは僕の肩に手を回すと、小突くような頭突きをして、笑いながら言う。

「いやねえ、こいつが中々見つからなくてさ」

「へえ」

意地悪そうな笑みで彼女は僕を見る。眼を細めて、少しだけ首を傾けて目を合わせてくる。逆に僕は目を合わせないように明後日の方向を向く。

「ああ、酷いなあフィルは私のこと嫌いなのかなあ？」

「……べ、別に誰も嫌いだなんて言っていないだろ」

僅かに動揺してしまったことで、言葉の出だしで噛んでしまった。そんな口調が可笑しかったのか、彼女は無理に目線を合わせようとしながら、意地の悪い言葉を投げかけてくる。長い青い髪を揺らしながら、首を逸らす僕の周りをくるくると回る。その度に彼女の胸元の銀色の三日月の飾りが着いたネックレスがチラついた。

「ねえねえ、どうなのかな？」

兄さんのクスクスという笑い声が僅かに聞こえてくる。ああ、恥ずかしいなあ、と思いながら僕は彼女の瞳から逃れ続けるが、不意に顔の両側を彼女の手には押さえつけられた。

そうやって僕を無理やり固定すると、顔を近づけてくる。少しだけ彼女の手の毛糸の手袋が柔らかくて、暖かくて気持ち良かった。

そうして僕と彼女の目が合って、自分の心臓がやたらと大きな音を立てて、早く動き出したのを感じた。

「ほら、キョロキョロしない！ で、どうなのかな？」

やや中腰の姿勢で覗き込む彼女の満面の笑みに、一瞬目が離せなくなる。そうしていたのが一秒だったのか、五秒だったのかは分からない。けれど、その目を奪われて停止した僕の時間は彼女の小悪魔的な笑いで、動き出した。

「ふふ、フィル顔真っ赤だよ」

言われて初めて自分の顔の熱さに気付き、慌てて彼女の手から逃れようと首を振る。でも、彼女は中々離してはくれない。それどころか「可愛い可愛い」なんて言ってはしゃいでいる。

スライドする視界の隅に、時たま映る兄さんの表情は何処か呆れたような笑顔だった。

「あんま、そういうところ見せ付けられると嫉妬しちゃうんですけど
お」

なんて兄さんが如何にも不満そうに笑顔で言って、僕達に手招きをする。そして彼女は「はいはい」なんて答えて、僕の頭をクシヤ

クシャと撫でた。

「フィルは本当に可愛いね」

僕は黙って俯く。少しの嬉しさと多くの悔しさを感じても、彼女に分からないように照れたふりをする。そうやって離れていく温もりと足音を静かに聞く。

自分の気持ちを抑えながら……

さっきまでは気付かなかった寒さが、今は身体ごと心を締め付けていた。

『D24ドームはこれより三十分後、消灯します。住民は速やかにご帰宅ください』

聞きなれたメロディーとアナウンスがドームに響き、僕達は公園を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1364c/>

BlueMoon

2011年10月4日00時07分発行